

夜なき石（三田市貴志）

貴志〈きし〉、御霊神社参道〈ごりょうじんじゃさんどう〉左側の草むらに、庭石〈にわいし〉にしてもよい恰好〈かつこう〉の石が、今でも無造作〈むぞうさ〉にころがっています。むかしから、茶臼石〈ちゃうすいし〉といっていますが、いつの頃から、三田藩九鬼〈みたはんくき〉の殿様が、どうしてもとお望みになり、「あの形のよい石を、急いで城に運び、庭石にするがよい。」と家臣〈かしん〉に命ぜられました。さっそく、人夫〈にんぷ〉をやとってお城へ運ぶことになりました。ところが、城へ近づくにつれて、その石は重みを増し、人夫を増員〈ぞういん〉して、やっとのことで城内へ運ぶことができました。庭師が、殿様のお望みどおりに庭石にしたところ、「みごとじゃ。みごとじゃ。」と大変およろこびになりました。



しかし、その日の夜もふけると、今までは、もの音一つしなかった静かな庭内から、殿様の寝室に女の人のすすり泣くような声が聞こえるではありませんか。それは怪しい声で、「貴志へかえりたい。貴志へかえりたい。」と、訴えているようでした。



あくる朝になりましたが、庭内は何一つ変わったこともなく、庭石も、きのうのままに横たわっていました。殿様は、ひとりで、「昨夜は、きつと、わしの空耳〈そらみみ〉であったにちがいない。」と苦笑〈くしょう〉され、だれにも話されないでおられました。また、夜がきました。昨夜と同じ時刻になると、「貴志へかえりたい。貴志へかえりたい。」と庭から同じ声が聞こえるのでした。殿様は顔色を変え、床〈とこ〉をけてはね起き、隣の部屋にひかえている二、三人の家臣をお呼びになり、このことをお話になると、「身共〈みども〉も、たしかに聞きました。」「気持が悪うございました。」と、顔を見合らし、異口同音〈いくどうおん〉に答えました。

このことは、城内はいうにおよばず、城下町〈じょうかまち〉にも伝わり、二人寄るとこの話でもちきりました。殿様は気味が悪くなられ、重臣〈じゅうしん〉と相談され、「あの石をきれいに清め、すぐさま、もとあった貴志の場所へかえすがよい。」と命ぜられました。

再び、人夫が動員〈どういん〉され、貴志へ送り返されることになりましたが、もとあった貴志の場所に近づくにつれ、その石は軽くなったといわれます。その後、城内がもとどおり、静かになったことは、言うまでもありません。また、それから後、その石を自分の家にもちかえて、庭石にしようとする人はなく、風雨〈ふうう〉にさらされ、むかしのままに、ほおっておかれています。

